使用説明書

ご使用前に
必ずお読みください

お買上げありがとうございます。

ミノルタCLEは「ミノルタ ダイレクト測光方式」による自動露出方式の、レンズ交換可能な距離計連動35mmカメラです。交換レンズはM-ロッコール40mm F2(標準)、28mmF2.8(広角)および90mmF4(望遠)の3本が用意されています。専用フラッシュ「ミノルタ オート エレクトロフラッシュ CLE」を使えば、カメラの自動露出制御機構でフラッシュも制御され、TTL自動調光によるフラッシュ撮影ができます。
初めてこのカメラをお使いになる方は、一般的な撮影手順を示した『基本操作編』をお読みください。さらに、このカメラの性能を十分ご活用いただくために、使用説明書を最後までお読みください。カメラの機能をよく理解し、カメラに慣れていただけば、カメラの活用範囲が広がるばかりでなく、撮影がいちだんと楽しいものとなります。

この使用説明書はM-ロッコール40mmF2レンズ付きで説明していますが、M-ロッコール28mmF2.8またはM-ロッコール90mmをお求めの方も使い方は同じです。

ミノルタCLEの機能を活用していただくためには当社独自のノウ・ハウによりボディ特性に適合するように設計・製造管理されている交換レンズおよび付属品のご使用をおすすめします。
当社以外の交換レンズまたは付属品を単に装着できるというだけでお使いになる場合、どのようなことが起こるか当社では予測できません。

目次

各部の名称

フイルム感度表示窓
フイルム感度指標
露出補正目盛
シャッターボタン
シャッターダイヤル
フイルムカウンター
オートロックボタン
レンズ交換ボタン
深度目盛
距離リングつまみ
距離リング(距離目盛)
距離指標
絞りリング(絞り目盛)
絞り指標

巻上げレバー

シャッターダイヤル指標
TTL自動調光接点
ダイレクト接点
シンクロオートコントロール接点
距離計窓
ホットシュー
ファインダー窓
リモートレリーズターミナル
つり金具
セルフタイマー作動表示ランプ
(バッテリーチェックランプ)
切換スイッチ
フレーム採光窓

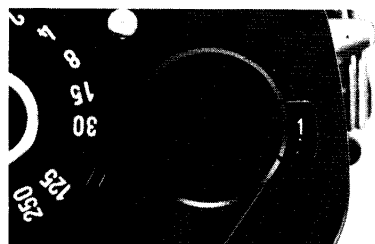
アイピース
シャッター幕
ガイドレール
スプロケット
スプール爪
裏ぶた

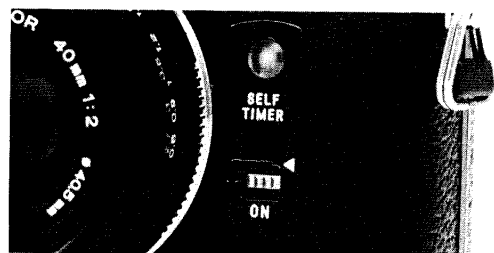
裏ぶた
開閉ノブ
巻戻しクランク
バッテリーチェックボタン
電池室ぶた
巻戻しボタン
三脚取付けねじ穴

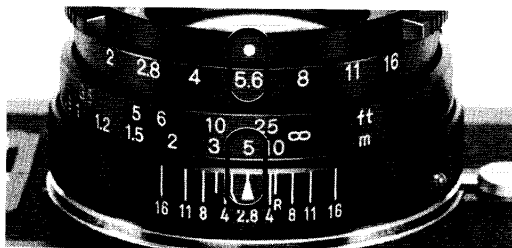
オート撮影の仕方早わかり

取扱いの詳細は各参照ページをご覧ください。

1 電池を入れます。
(12ページ参照)

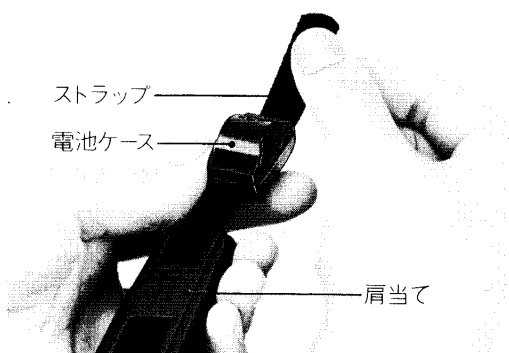
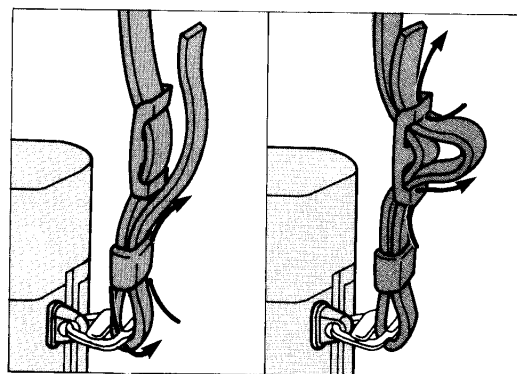
2 電池をチェックします。
(13ページ参照)

5 裏ぶたを閉じて、フイルムカウンターが1になるまで巻上げてシャッターを切る操作を繰り返します。(19ページ参照)

6 シャッターダイヤルを◁Aにセットし、フイルム感度を合わせます。(20ページ参照)

3 切換スイッチをONにします。
(14ページ参照)

4 裏ぶたを開け、フイルムを入れます。
(16ページ参照)

7 絞りをセットし構図を決めてピントを合わせます。
(22・26ページ参照)

8 シャッターボタンを押して撮影します。
(28ページ参照)

撮影の準備

ストラップの取付け

1 電池ケースおよび肩当てをストラップに通します。

2 ストラップの両端を三角環に通して固定します。

レンズの着脱

レンズの取付け

1 レンズキャップとレンズ後キャップをはずします。

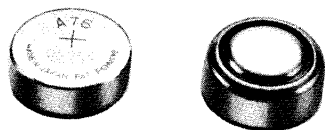
2 カメラからボディキャップをはずします。

3 レンズの赤点をボディの赤指標に合わせてはめ込み、ロックがかかるまで回して取付けます。

レンズの取りはずし

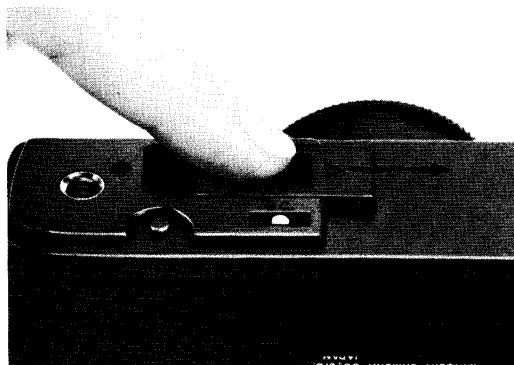
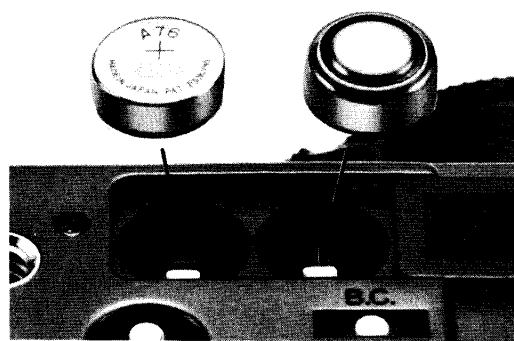
レンズ交換ボタンを押したまま、止まるまで回して、前方に引き出してはずします。

電池について

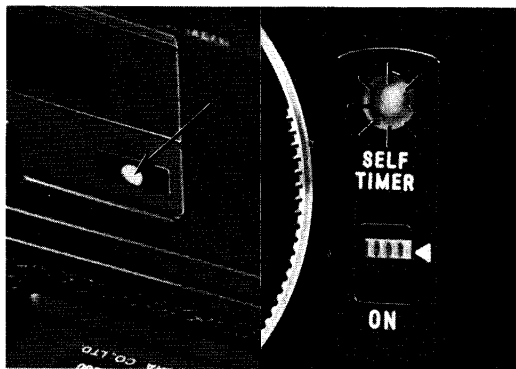
使用する電池

電池はLR44(A76)型アルカリマンガン電池(1.5V)、またはG13型(JIS SR44)銀電池(1.5V)を2個使います。

●同じ大きさ、形状の水銀電池(1.35V)が市販されていますので、間違いないように買い換えのときは必ず、上記の電池をご指定ください。

★銀電池とアルカリマンガン電池を混ぜて使用したり、新しい電池と古い電池を混ぜて使用すると、電池の液もれや破裂の原因になりますので避けてください。

電池の入れ方

1 電池室ぶたを矢印方向(◀)に押して開けます。

2 電池室内の＋－の極性表示に従い、電池を入れます。

3 電池室ぶたを閉めます。

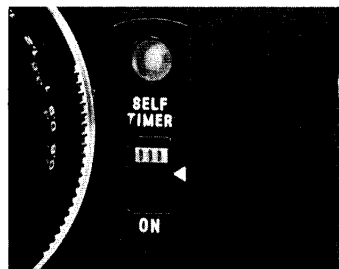
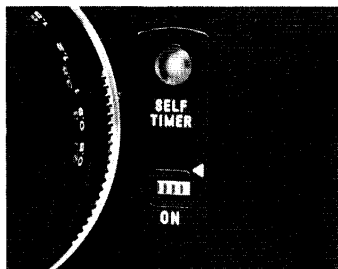
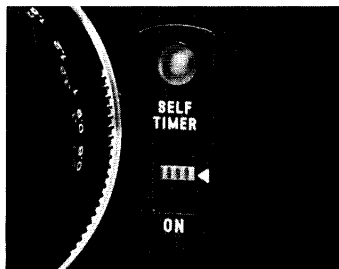
電池のチェック

撮影する前に電池の性能が十分であるかどうか確認してください。

バッテリーチェックボタンを押します。

バッテリーチェックランプが点灯すれば、電池の性能は十分です。

バッテリーチェックランプが点灯しないときは、電池の入れ方を間違えたか、電池が消耗しているかです。入れ直すか、新品電池と交換してください。

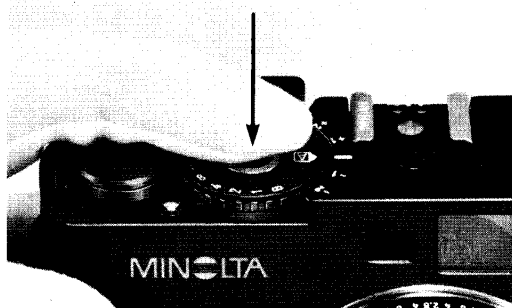
切換スイッチについて

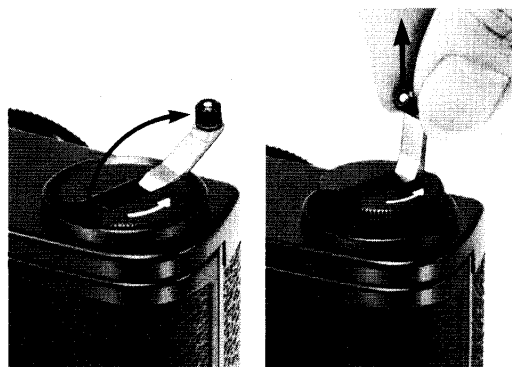
切換スイッチの操作は、スイッチの突起をレンズ側に押してから行ないます。切換スイッチは次のような機能になっています。

1）切換スイッチが、◀の位置ではシャッターボタンを押してもシャッターは切れません。
カメラを使用しないときはこの位置にセットします。

2）切換スイッチが、ONの位置ではカメラが作動状態となります。

3）切換スイッチが、SELF TIMERの位置では作動時間約10秒のセルフタイマーがセットされます。

シャッターボタン(タッチスイッチ)について

切換スイッチがONのときシャッターボタンは、測光スイッチも兼ねています。シャッターダイヤルが◁Ⓐのとき、指がシャッターボタンに触れると測光スイッチがONになり、セットした絞り値と被写体の明るさに応じた、適正なシャッター速度がファインダー内にLED(●)で表示されます。また、フラッシュ撮影のとき、充電が完了すれば60の横のLEDが点滅します。

- 手袋など、指を覆う物をはめているときは表示がでません。また、低温度下で使用したり、指が極度に乾いていると、シャッターボタンに触れても表示が出ないことがあります。このようなときは、シャッターボタンを少し押すと測光スイッチがONになります。
- シャッターボタンが汚れている場合は、シャッターボタンに指が触れても表示が出ないことがあります。切換スイッチをOFFにして、清潔な布できれいにふきとってください。

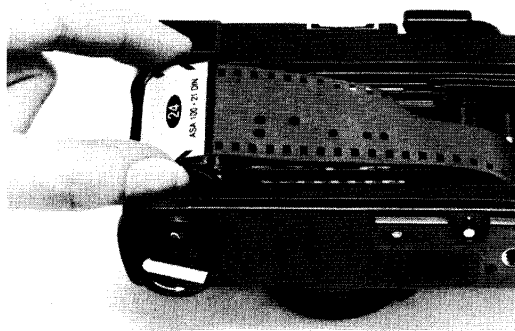
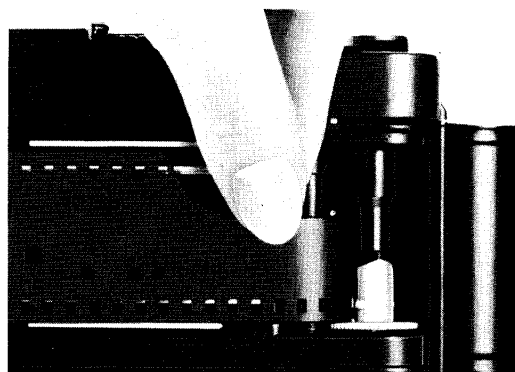
フイルムの入れ方

1 巻戻しクランクを起こして、裏ぶた開閉ノブを引き出します。

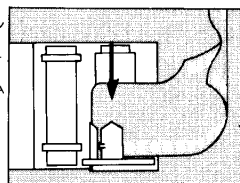
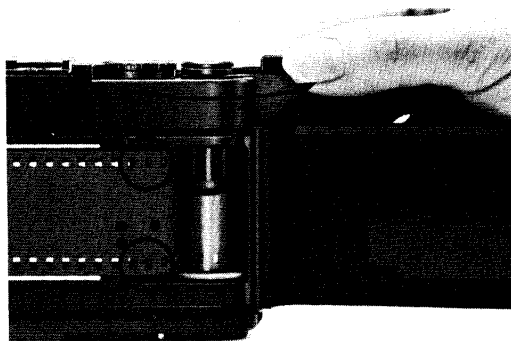
2 裏ぶた開閉ノブを矢印方向に回して裏ぶたを開けます。

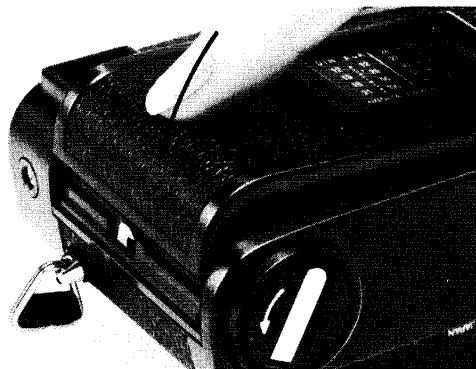
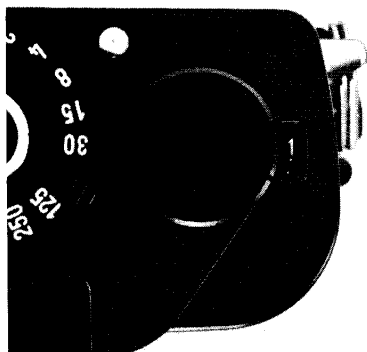
使用するフイルム

パトローネ入り35㎜ロールフイルム(J135タイプ)。
フイルムの出し入れは、直射日光の当らない場所で行なってください。

次のページへつづく⟶

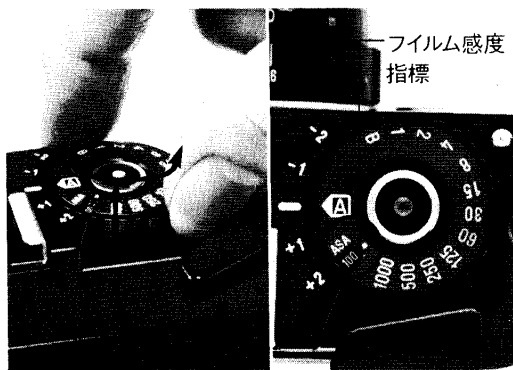
3 フイルムを入れます。

4 フイルムの先を差し込みます。

- フイルムをスプール爪に差し込むときは、イラストや写真で示すように上からフイルムを差し込みます。

5 フイルムの上下の穴がスプロケットの歯にかみ合うまで、巻上げてシャッターを切る操作を繰り返します。

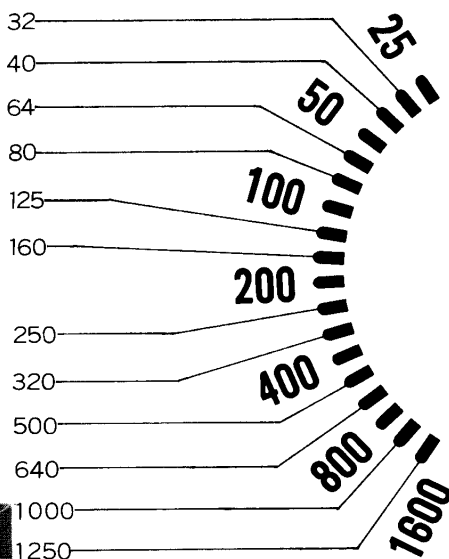
●暗いところやレンズキャップをつけたままでシャッターを切る場合、シャッターダイヤルを1000にセットしてください。

6 裏ぶたを静かに閉じます。

7 フイルムカウンターが 1になるまで、フイルムを巻上げてシャッターを切る操作を繰り返します。

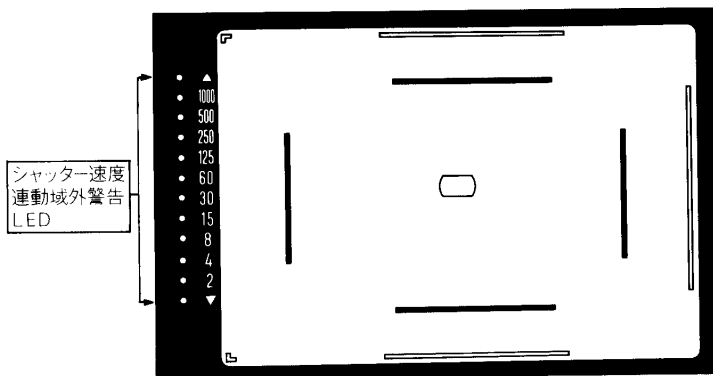
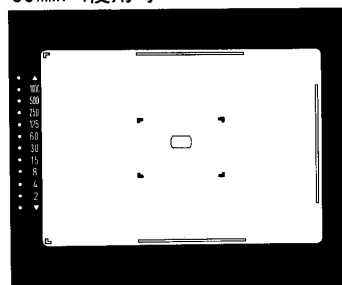
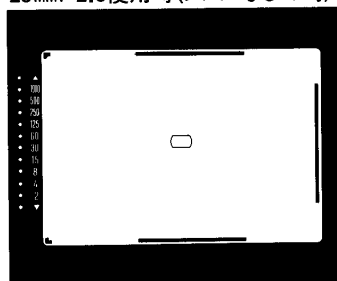
メモホルダー

使用フイルムの箱のふたを切り取り、メモホルダーに差し込んでおけば、撮影中のフイルムの種類や枚数がひと目でわかりますから、ご利用ください。

フイルム感度の合わせ方

シャッターダイヤルを〈A〉にセットしてから、シャッターダイヤルの外周リングを引き上げたまま回して、使用するフイルムの感度(ASA/ISO)をフイルム感度指標に合わせます。

● たとえば、ASA/ISO100のフイルムなら、フイルム感度指標に100をセットします。

● フイルム感度の数値は、次のとおりです。

ファインダー視野枠について

40mmF2使用時

90mmF4使用時

28mmF2.8使用時(レンズなしの時)

ファインダー視野枠は、レンズの有無または使用レンズによって図のように変化します。撮影時は使用するレンズのファインダー視野枠内に被写体をおさめてください。

● ファインダー視野枠やファインダー内表示がはっきり見えない方の場合、別売の視度調整アタッチメントV_Nをご使用ください。

● 各レンズの視野枠は、撮影距離に応じてパララックス(視差)が自動的に補正されます。

ピントの合わせ方

ピント合わせは、ファインダー中央の（□）の部分で行ないます。
ピント合わせには次の2通りがあります。被写体に応じて合わせやすい方法で行なってください。

①二重像合致式

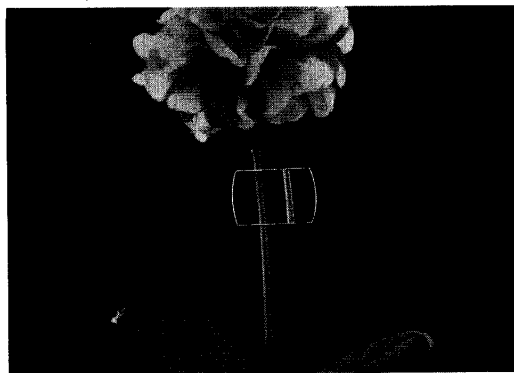
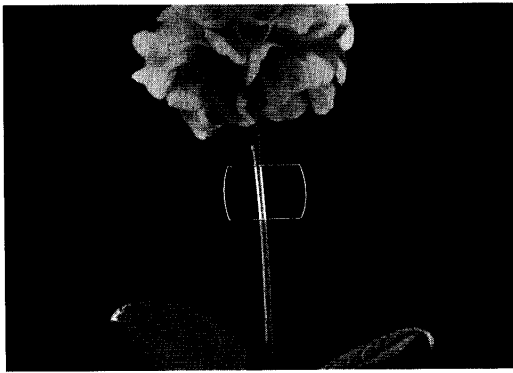
最も一般的な方法です。人物撮影などで目にピントを合わせるとき、被写体をファインダーで見ながら、（□）の部分の像がひとつに重なるように、レンズの距離リングを回します。

ピントが合っていないとき

ピントが合ったとき

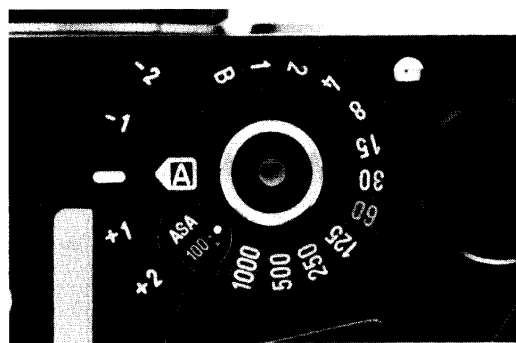
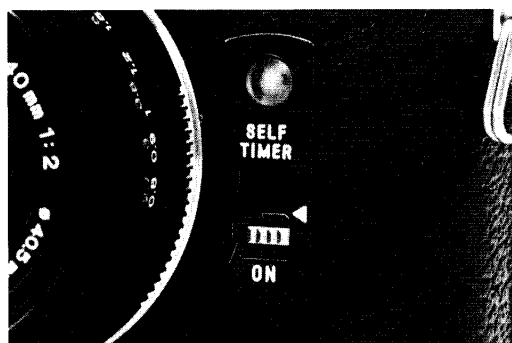
②上下像合致式

被写体の端や明確な線のようなもの（電柱とか電線）が距離計視野の上下からはみ出しているような場合、レンズの距離リングを回して図のように照準する視野内で一致させます。

ピントが合っていないとき

ピントが合ったとき

基本操作編

オート撮影の仕方(絞り優先自動露出)

次ページへつづく⟶

1 シャッターダイヤルの〈A〉を指標に合わせます。

2 使用するフイルムの感度をフイルム感度指標に合わせます。

3 切換スイッチをONの位置にセットします。

4 絞りを合わせます。

次ページへつづく⟶

5 ファインダー(アイピース)をのぞいたまま、距離リングを回してピントを合わせます。
(22ページ参照)

6 シャッターボタンに指を触れます。

● ファインダー内▲の横のLED(●)が点灯したときは、高速度連動外を示します。そのまま撮影すると適正露出は保証されません。自動露出連動シャッター速度(ASA/ISO 100以下の場合、1/2〜1/1000秒)になるように、絞りリングを絞り込む方向(F16の方向)に回してください。(自動露出連動シャッター速度は、使用するフイルムの感度によって28ページ表1のように変わります)

表1 CLEの自動露出連動シャッター速度

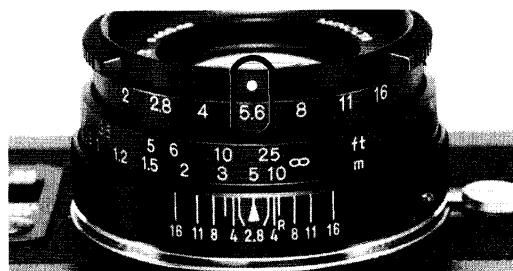
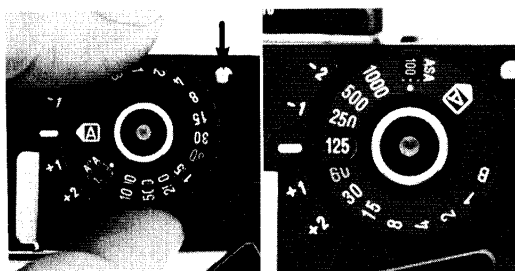
ASA/ISO	自動露出連動シャッター速度
100以下	1/2〜1/1000秒
200	1/4〜1/1000秒
400	1/8〜1/1000秒
800	1/15〜1/1000秒
1600	1/30〜1/1000秒

- ファインダー内▼の横のLED(●)が点灯したときは、低速度連動外を示します。そのまま撮影すると適正露出は保証されません。自動露出連動シャッター速度になるように、絞りリングを開く方向(F2の方向)に回すか、照明を明るくする(あるいはフラッシュ撮影)などして、自動露出連動シャッター速度になるようにしてください。(表1参照、ASA/ISO 1600で使用する場合は、15の横のLEDが点灯しても低速度連動外となります)

7 シャッターボタンを押して撮影します。

★撮影されたプリント用のフイルムからサービス・サイズにプリントしたり、スライド用のフイルムをマウントすると、実際に撮影した画面よりも、やや狭くなります。撮影の際に画面の周辺部に少し余裕をとることをおすすめします。

マニュアル撮影の仕方

CLEは自動露出カメラですが、マニュアル撮影もできます。入射光式など単独露出計による露出決定に基づいて撮影するとき、露出補正量が−2EVまたは+2EVを超えるとき、M級、MF級、FP級などのフラッシュバルブを用いて撮影するときにはマニュアル撮影をしてください。

1 オートロックボタンを押したままシャッターダイヤルを回し、撮影するときのシャッター速度(1秒から1/1000秒)をセットします。

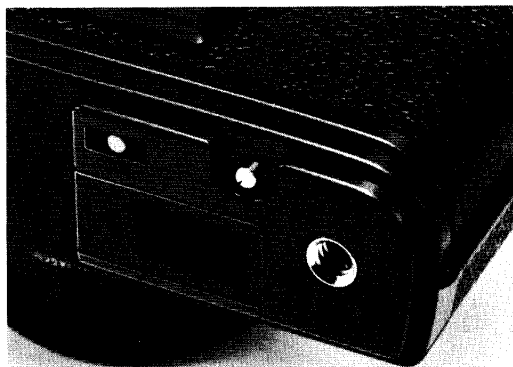
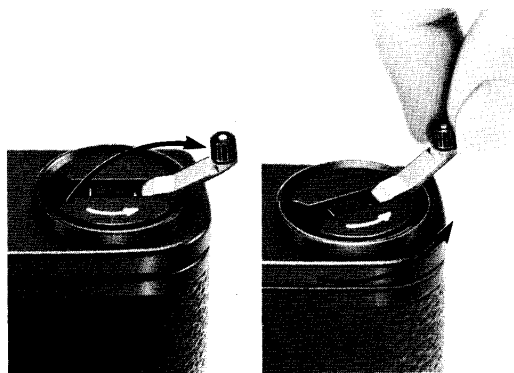
- マニュアル撮影では、ファインダー内のシャッター速度表示用LEDは点灯しません。
- シャッターダイヤルB(バルブ)は、シャッターボタンを押している間シャッターが開いています。シャッターボタンから指を離せばシャッターは閉まります。

2 絞りリングを回して絞り値をセットします。

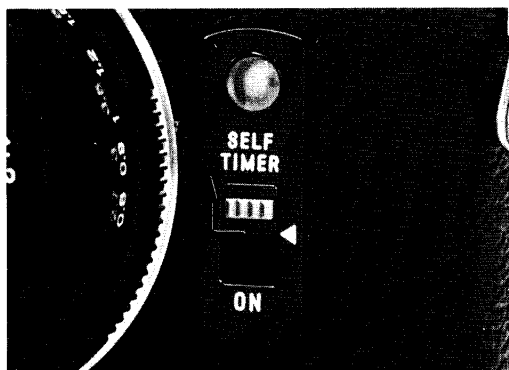
3 シャッターボタンを押して撮影します。

- マニュアル撮影時は、カメラにセットしたシャッター速度と絞り値で撮影されます。

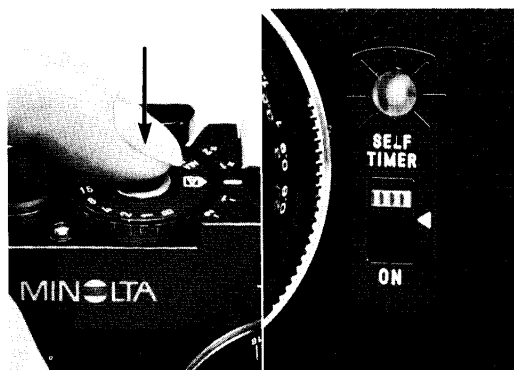
フイルムの巻戻し方

撮影の終ったフイルムは、次の要領で巻戻して、
直射日光の当らない場所で取り出してください。

1 巻戻しボタンを押し込みます。

2 巻戻しクランクを起こし、矢印方向に回して
巻戻します。

3 裏ぶたを開けてパトローネを取り出します。

セルフタイマーの使い方

1 フイルムを巻上げ、ピントを合わせます。

2 切換スイッチを SELF TIMER 位置にします。

★セルフタイマーは、シャッターダイヤルがB(バルブ)の位置では作動しません。

3 シャッターボタンを押します。

● セルフタイマー作動表示ランプが点滅し、約10秒後にシャッターが切れます。シャッターが切れる約2.5秒前には、点滅サイクルが短くなります。

4 セルフタイマー撮影が終れば、切換スイッチを◀位置またはON位置にします。

● SELF TIMER の位置のままですと、次の撮影もセルフタイマー撮影となります。

フラッシュ撮影の仕方(パート1)

次ページへつづく⟶

ミノルタ オート エレクトロフラッシュ CLEを使用する場合

「ミノルタ オート エレクトロフラッシュ CLE」は、ミノルタCLEには欠かせないフラッシュです。ここでは、フラッシュCLEの主な特長と簡単な使い方を紹介します。

《ミノルタオートエレクトロフラッシュCLEの特長》

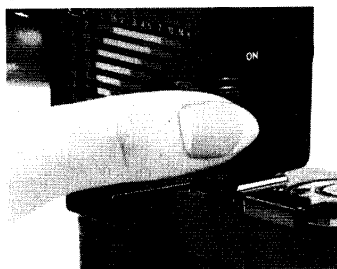
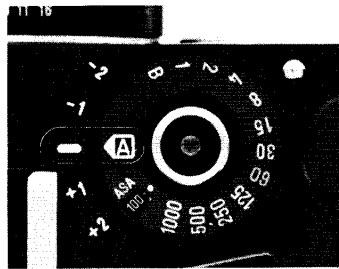
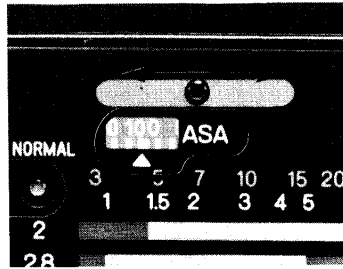
● 本機とフラッシュCLEを組み合わせて使用すると、ミノルタ ダイレクト測光方式により、撮影レンズを通ったフラッシュ光を自動制御します。

● 使用レンズのすべての絞り値が使えます。したがって、ガイドナンバー14(ASA/ISO 100,m)のフラッシュでも、オートで近距離から遠距離の被写体まで撮影できます。

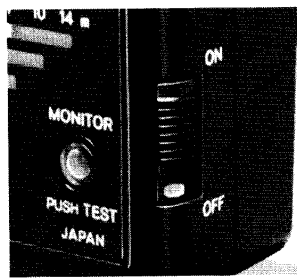
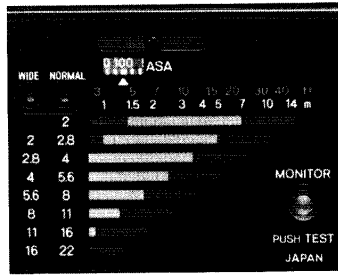
● 本機のシャッターダイヤルは◁Aのままで OK。充電が完了していても、自然光の明るさで十分な場合は、フラッシュは発光しません。また、フラッシュが未充電、または電源スイッチを切ると、カメラのオート撮影となります。

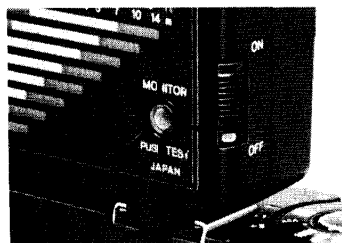
● 本機のシャッターダイヤルを◁Aにし、レンズの絞りをセットすれば、フラッシュCLEには何もセットする必要がありません(調光距離範囲を確認するときのみ、フラッシュCLEにフイルム感度をセットします)。

● 詳しくは、ミノルタ オート エレクトロフラッシュ CLEの使用説明書をご覧ください。

《ミノルタオートエレクトロフラッシュCLEの使い方》

1 ホットシューにフラッシュを取付けます。

2 シャッターダイヤルを◁Aにセットします。

3 フラッシュのフイルム感度表示窓に使用フイルムの感度(ASA/ISO)を合わせます。

次ページへつづく⟶

4 絞りをセットし、ピントを合わせます。

5 電源スイッチをONにします。

6 セットした絞りで、撮影距離が調光距離範囲内にあるかを確かめます。

- 調光距離範囲内でない場合は、絞りまたは撮影距離を変えて、調光距離範囲内になるようにしてください。
- 調光距離範囲は、使用するフイルムの感度と使用する絞り値によって変わります。

7 充電が完了したことを確認します。

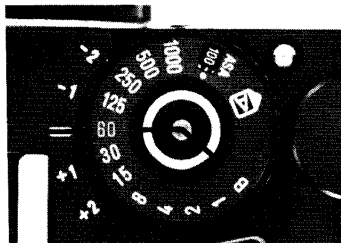
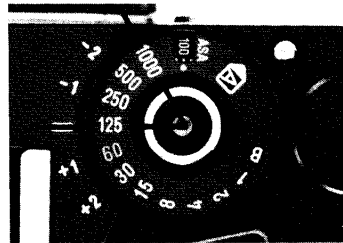
- 充電が完了すると、フラッシュ本体背面のモニターランプが点灯します。このとき、シャッターボタンに指を触れると、ファインダー内の60の横のLED(●)が点滅し、フラッシュ撮影準備完了を知らせます。
- 自動露出撮影のシャッター速度が1/60〜1/1000秒の場合、充電が完了してもLEDは点滅しません。

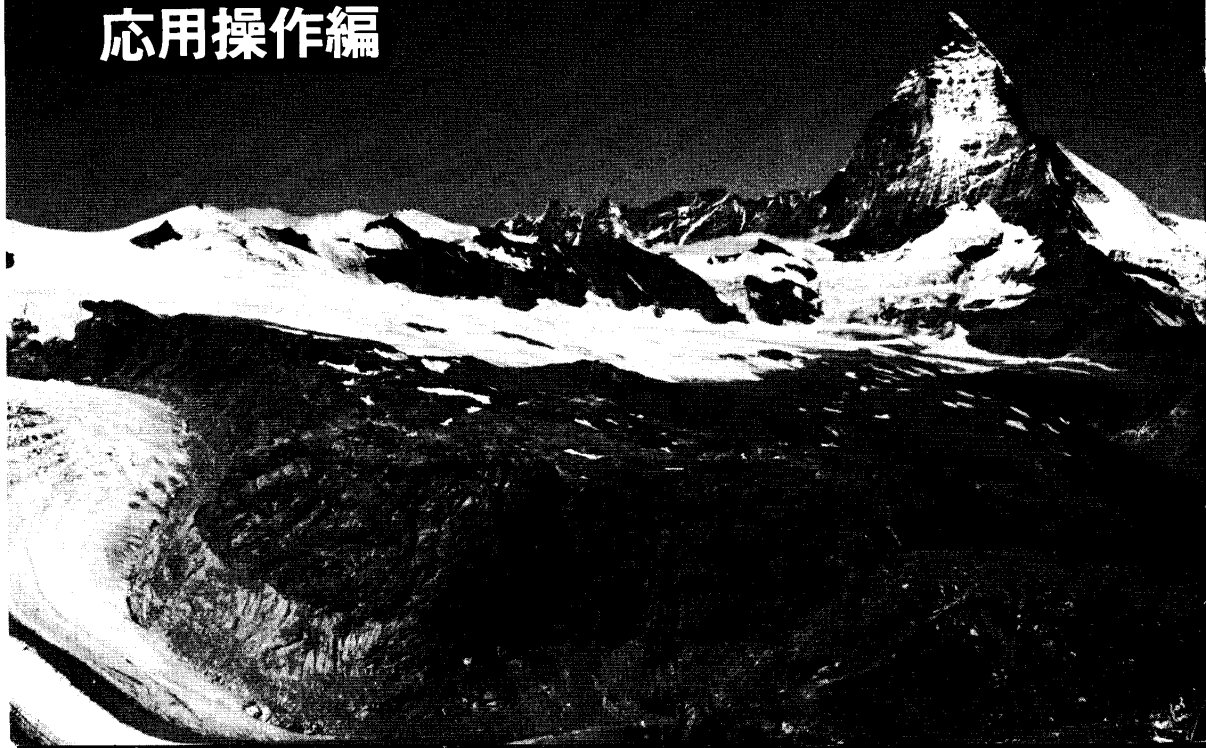
8 シャッターボタンを押して撮影します。

- ファインダー内の60の横のLEDが点滅している状態でシャッターボタンを押すと、同調速度でシャッターが切れ、TTL自動調光によるフラッシュ撮影となります。

- LEDが点滅しない状態でシャッターを切ると、フラッシュは発光しないで自然光による自動露出撮影となります。ただし、自動露出撮影で60の横のLEDが点灯しているときは、実際に切れるシャッター速度に応じて、フラッシュが発光してTTL自動調光する場合と、発光しないで自動露出となる場合があります。
- オート フラッシュ撮影をやめて、カメラをオート撮影に切り換える場合は、フラッシュの電源スイッチをOFFにします。ただし、暗いところでオート撮影する場合は、自動露出連動シャッター速度にご注意ください(28ページ表1参照)。

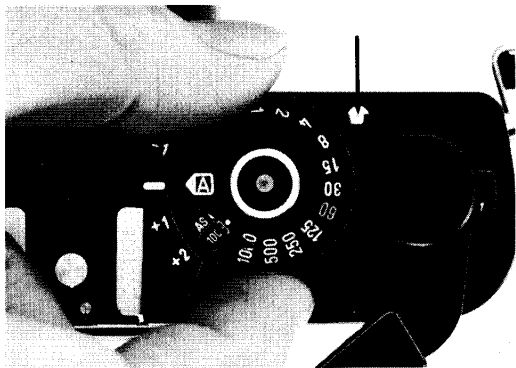
- フラッシュ撮影終了後、次の充電が完了するまでにシャッターを切ると、フラッシュは発光しないで自動露出撮影となります。
- セルフタイマーでオートフラッシュ撮影する場合は、ファインダー内の60の横のLEDの点滅を確認してから、シャッターボタンを押してください。
- フラッシュをぜひ発光させたい場合は、絞りリングを絞り込む方向に回して、60の横のLEDが点滅するように調節してください。

シャッターダイヤルが◁A以外のとき

- シャッターダイヤルが60〜1またはBのとき、セットしたシャッター速度で切れてフラッシュが発光します。したがって、低速シャッターによるフラッシュ撮影ができます。この場合、ガイドナンバー14(ASA/ISO 100,m)のマニュアルフラッシュとなります。撮影の仕方は50・51ページをご覧ください。

- シャッターダイヤルが125〜1000のとき、セットしたシャッター速度で切れますが、露出ムラを防止するためにフラッシュは発光しない機構になっています。
- シャッターダイヤルが◁A以外のときは、ファインダー内のLEDは、点灯も点滅もしません。

応用操作編

露出補正の仕方

次ページへつづく⟶

自動露出撮影の標準値で逆光の人物を撮影すると、顔が暗くなったり、背景を入れてスポットライトの当った人物を撮影すると、顔が白っぽくなったりすることがあります。このようなときは、露出の補正をすれば適正な写真が写せます。

露出の補正は標準値に対して、露出過度側および露出不足側とも2段階までできます。露出過度にしたいときは(＋)側へ、露出不足にしたいときは(－)側へシャッターダイヤルを回し、◁Aを露出補正目盛に合わせます。

1 オートロックボタンを押したまま、希望する方向へシャッターダイヤルを回します。

● 露出の補正は、＋2または－2の範囲を超えないようにしてください。

表2 露出補正の例

被写体	露出補正量
逆光の人物 空のたくさん入った風景	＋1 ～ ＋2
雪上の人物 空をバックに入れた人物	＋1 (画面の中の雪や空の部分が少ないときは、補正しなくても結構)
バックが暗いとき スポットを浴びた人物	−1 ～ −2

2 露出の補正をして撮影した後は、必ず元のようにシャッターダイヤル指標に◁Aを合わせます。

- 補正したままにしておくと、続けて露出補正した写真になります。
- 補正量を決めにくいときは、前後に½段階くらいずつ補正値を変えて、2～4枚撮影してみてください。

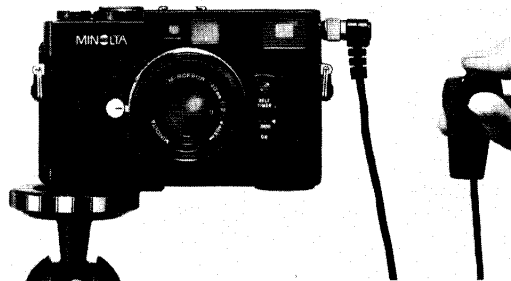
★R60(整色用)フィルターを取付けて撮影する場合、シャッターダイヤルの◁Aを指標と＋1の間のクリック位置(＋½段の露出補正)にセットしてください。

補正しないとき

補正したとき(＋2)

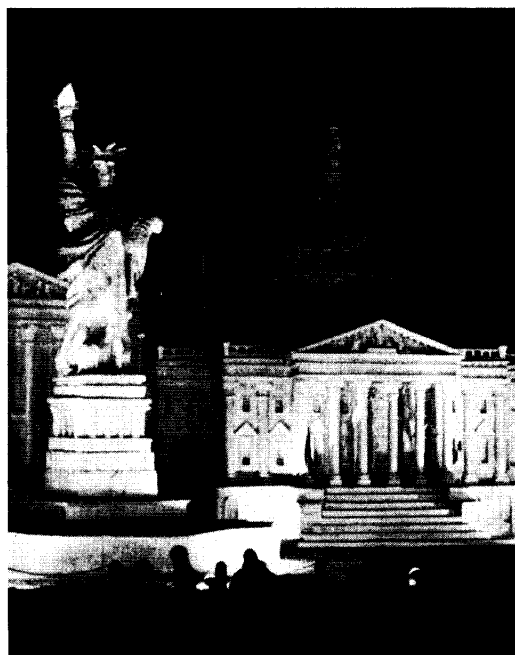
長時間露出撮影(バルブ撮影)の仕方

夜景や天体写真などを1秒より長いシャッター速度で撮影する場合は、シャッターダイヤルをB(バルブ)にセットして撮影してください。シャッターダイヤルをBにセットすれば、シャッターボタンを押している間シャッターが開いています。

1 シャッターダイヤルのBを指標に合わせます。

2 シャッターボタンを押して撮影します(写真はリモートコードを使用しています)

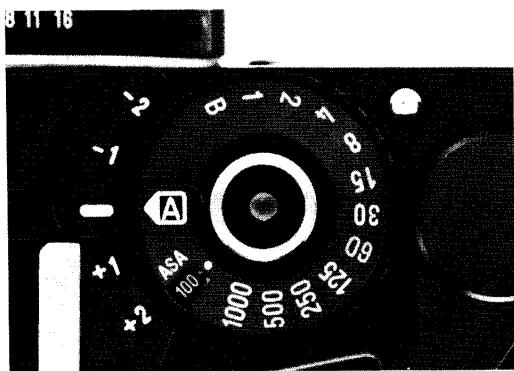
● 長時間露出の途中でカメラの電池がなくなると、シャッターが閉まり露出が中止されます。新品の銀電池を使えば常温(20〜30℃)で、最長約4時間までの長時間露出ができます。低温のところで使うと、もう少し短くなります。

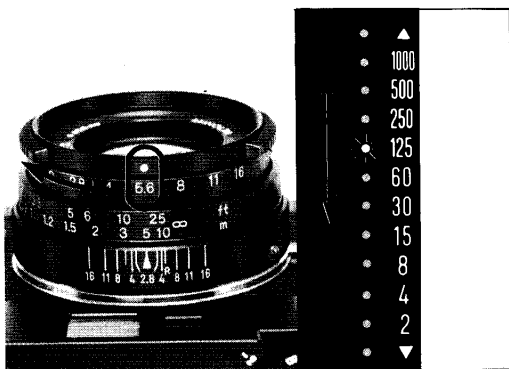
★ケーブルレリーズでB(バルブ)撮影しているとき、ケーブルレリーズがカメラや三脚などの金属部分に触れるとシャッターが閉まりますので、ご注意ください。

★本機の三脚取付けねじ穴の深さは5.9mmです。ねじ穴の深さより長い三脚ねじを使用すれば、カメラの内部機構を破損するおそれがあります。また、ねじ込みの際、カメラを回して必要以上の力を加えないでください。

シャッター速度を先に決めて写す方法

本機は絞り優先のオート カメラですが、シャッター速度を先に決めてオート撮影することもできます(ここでは、オート撮影で説明していますが、マニュアル撮影もできます)動きのある被写体を低速シャッターでブラして動感を表現したいときや、高速シャッターで静止させたいときに適しています。

流動感を表現したい時

動きを止めたい時

1 シャッターダイヤルの◁Aを指標に合わせます。

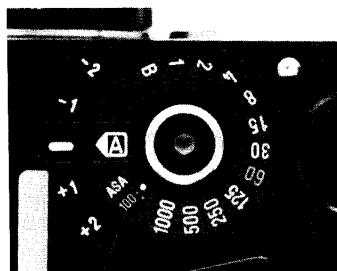
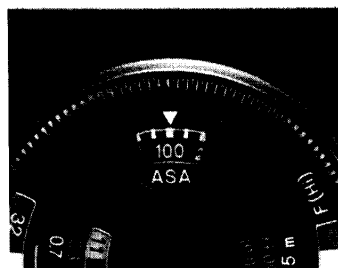
2 構図を決めてピントを合わせます。

3 シャッターボタンに指を触れて、ファインダー内のLED(●)が希望するシャッター速度を指示するように、絞りリングを回して絞り値をセットします。

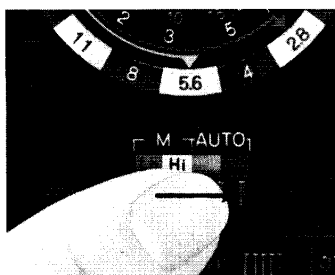
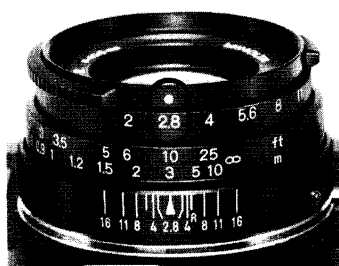
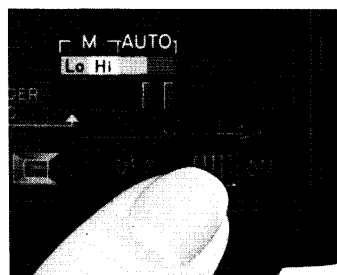
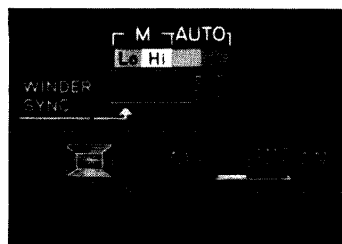
4 シャッターボタンを押して撮影します。

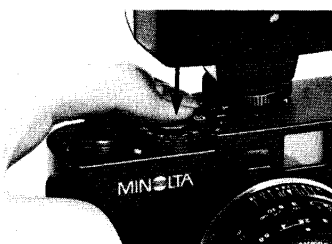
フラッシュ撮影の仕方(パート2)

オート エレクトロフラッシュ 200Xなど、ミノルタXシリーズのフラッシュを使用する場合

(写真は200Xを使用しています)

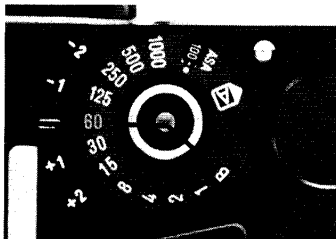
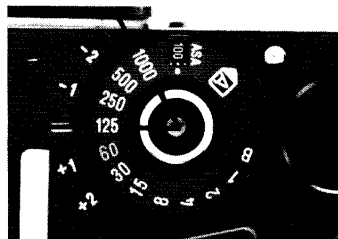
1 ホットシューにフラッシュを取付けます。

2 シャッターダイヤルを◁Aにセットします。

3 フラッシュの露出計算盤に使用フイルムの感度を合わせます。

次ページへつづく⟶

4 フラッシュのA-M切換スイッチをAUTOに合わせます。

5 レンズの絞りを指定の絞り値にセットします。
(フラッシュの使用説明書を参照してください)

6 フラッシュの電源スイッチをONにします。

7 充電が完了したことを確認します。

- 充電が完了すると、フラッシュ本体背面のパイロットランプ(モニターランプ)が点灯します。このとき、シャッターボタンに指を触れると、ファインダー内の60の横のLEDが点滅し、フラッシュ撮影の準備完了を知らせます。
- 自動露出撮影のシャッター速度が1/60〜1/1000秒の場合、充電が完了してもLEDは点滅しません。

8 シャッターボタンを押して撮影します。

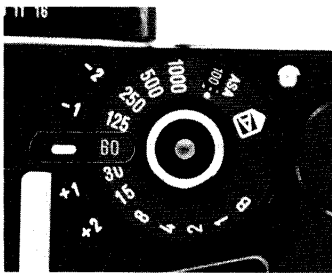
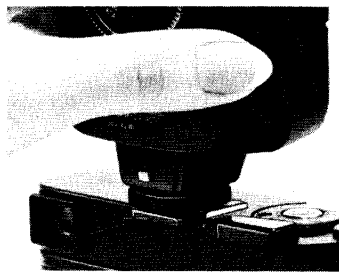
- ファインダー内の60の横のLEDが点滅している状態でシャッターボタンを押すと、同調速度でシャッターが切れます。
- LEDが点滅しない状態でシャッターを切ると、フラッシュは発光しないで自然光による自動露出撮影となります。ただし、自動露出撮影で60の横のLEDが点灯しているときは、実際に切れるシャッター速度に応じて、フラッシュが発光する場合と、発光しないで自動露出となる場合があります。
- フラッシュをぜひ発光させたい場合は、シャッターダイヤルを1/60秒またはそれより長秒時にセットしてください。

- フラッシュ撮影終了後、次の充電が完了するまでにシャッターを切ると、フラッシュは発光しないで自動露出撮影となります。
- オート フラッシュ撮影をやめて、カメラをオート撮影に切り換える場合は、フラッシュの電源スイッチをOFFにします。ただし、暗いところでオート撮影する場合は、自動露出連動シャッター速度にご注意ください(28ページ表1参照)

シャッターダイヤルが A 以外のとき

- シャッターダイヤルが60〜1またはBのとき、セットしたシャッター速度で切れてフラッシュが発光します。したがって、低速シャッターによるフラッシュ撮影ができます。

- シャッターダイヤルが125〜1000のとき、セットしたシャッター速度で切れますが、露出ムラを防止するためにフラッシュは発光しない機構になっています。
- ファインダー内のLEDは、点灯も点滅もしません。

ミノルタ オート エレクトロフラッシュCLE(マニュアルフラッシュ時)およびミノルタXシリーズ以外のフラッシュを使用する場合は、50ページの『フラッシュ撮影の仕方(パート3)』を参照してください。

フラッシュ撮影の仕方(パート3)

ミノルタ オート エレクトロフラッシュCLE(マニュアルフラッシュ時)およびミノルタXシリーズ以外のフラッシュを使用する場合

$$\text{絞り値(FNo.)} = \frac{\text{ガイドナンバー(m)}}{\text{撮影距離(m)}}$$

1 ホットシューにフラッシュを取付けます。

★コード式のフラッシュは使用できません。

2 フラッシュ同調表に従ってシャッター速度をセットします。

● 一般のエレクトロフラッシュの場合は1/60秒にセットします。

3 フラッシュのガイドナンバーを基準にして絞りを決めます。

● 絞りの決め方は、次の式から絞り値を求めます。端数があるときは、それより開放寄りにいちばん近い絞り値で撮影します。

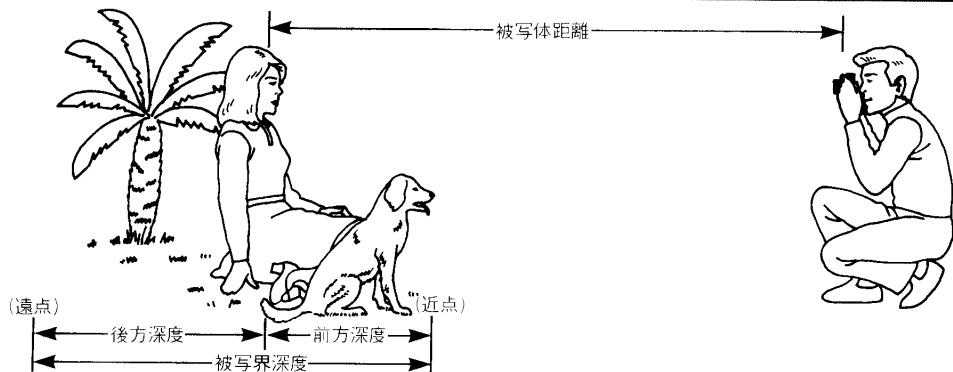
● オートエレクトロフラッシュを使用する場合の絞りの決め方は、その使用説明書に従ってください。

表3 フラッシュ同調表

使用するフラッシュ ＼ シャッター速度	B	1	1/2	1/4	1/8	1/15	1/30	1/60	1/125	1/250	1/500	1/1000
エレクトロフラッシュ	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
MF級、F級 FP級バルブ	○	○	○	○	○	○	△	△	×	×	×	×

○; 同調する
△; 同調しない
×; 発光しない

4 シャッターボタンを押して撮影します。

被写界深度について

ある絞り値で被写体にピントを合わせた場合、その被写体の前後の一定の範囲が鮮明で、それ以外のものは被写体から離れるにしたがってだんだんボケが大きくなります。この鮮明な範囲が被写界深度で、範囲が広いときに深度が深いといい、範囲が狭いときに深度が浅いといいます。

絞りを開放付近にして背景をボカして主要被写体を浮き出させたり、最小絞り付近にして奥行きのある被写体の全体にピントを合わせるなど、被写界深度を有効に使えば、写真表現が豊富になります。

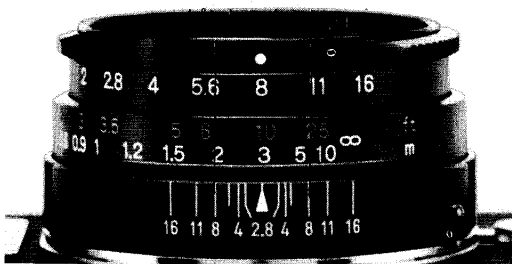
被写界深度には次のような性質があります。

1. 絞り値(FNo.)が大きいほど被写界深度が深くなり、小さいほど浅くなります。
2. 前方深度(近点)は後方深度(遠点)より浅くなります。
3. 撮影距離(被写体距離)が遠くなるほど深く、近くなるほど浅くなります。
4. 同じ絞り値(FNo.)または同じ撮影距離(被写体距離)では、焦点距離が短くなるほど深く、長くなるほど浅くなります。

F2

F11

深度目盛

正確な被写界深度は、レンズの使用説明書の被写界深度をご覧ください。
被写界深度は各レンズの深度目盛でもわかります。

たとえば、40mmF2レンズで、撮影距離が3mのとき、絞りをF8に絞って撮影すると、▲マークの両側にある8の範囲内(約2〜6m)のものはだいたい鮮明に写ることがわかります。

深度目盛は、目測でピントを合わせてスナップ撮影するときや、絞り効果を意図して撮影するときに利用すると便利です。

赤外線写真撮影(Rマークについて)

白黒赤外フイルムの場合

O56またはR60フイルターを用いて撮影します。赤外線は、通常撮影する可視光線よりも波長が長いため、ファインダーでピントを合わせただけではフイルム面でピントが合いません。そのため、3種類のM-ロッコールレンズにはすべて、深度目盛のところに“R”で、赤外線用ピント補正の位置を表示しています。赤外線写真を撮影する場合は、一度ピントを合わせた後、距離指標(▲)で距離目盛の数値を読み取り、Rマークまでズラして撮影します。

- Rマーク位置は波長768nmで計算されたものです。赤外ストロボの種類によっては、Rマークにズラしただけでは、ピントが合わないものもありますから、テスト撮影により確かめてください。
- 撮影するときは、赤外フイルムの使用説明書に従って露出を決めてから撮影してください。

ライツ ミノルタCL用レンズについて

既に、ライツ ミノルタCL用レンズをお手持ちの方は、本機に取り付けて使えます。ただし、無限遠で距離計の二重像が多少ズレて見えることがあります。この場合は、最寄りの当社サービス・ステーションにご相談ください。

専用アクセサリー

オート エレクトロフラッシュ CLE

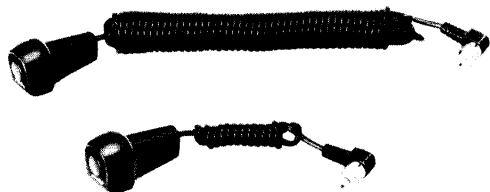
オート エレクトロフラッシュ CLEは、ミノルタCLE専用として開発された、ガイドナンバー14(ASA/ISO 100,m)の小型フラッシュです。ミノルタCLEと組み合わせて使用すれば、カメラの自動露出制御機構でフラッシュも制御され、TTL自動調光によるフラッシュ撮影ができます。
シャッターダイヤルを◁Aに合わせておけば、シャッター速度が1/60秒より高速のときはフラッシュは発光しないで、自然光のみで撮影されます。また、シャッター速度が1/60秒より低速のときは自動的に同調速度に切り換わり、オートフラッシュ撮影になります。
さらに、28mm広角レンズの画角をカバーする、ワイドパネルを内蔵しています。

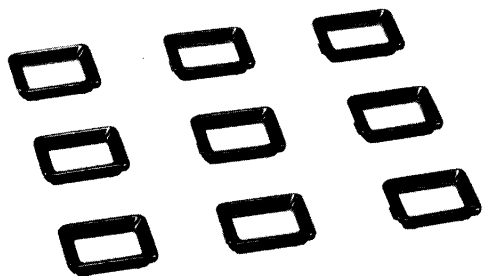
M-ロッコール28mmF2.8/40mmF2/90mmF4

M-ロッコール28mmF2.8(広角)、40mmF2(標準)、90mmF4(望遠)は、ミノルタCLE用交換レンズとして、特にコンパクト化をめざして開発されたレンズです。

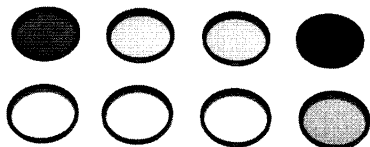
主な性能

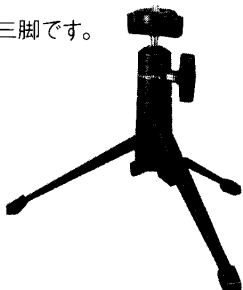
項目 \ レンズ名	M-ロッコール28mmF2.8	M-ロッコール40mmF2	M-ロッコール90mmF4
レンズ構成	5群7枚	4群6枚	4群4枚
画角(対角線、水平、垂直)	75°・65°・46°	57°・48°・33°	27°・23°・15°
絞り目盛	2.8〜22	2〜16	4〜22
最短撮影距離	0.8m		1m
大きさ(最大径×全長)	φ51mm×35.5mm	φ51mm×24.5mm	φ51mm×60.0mm
フィルター径		φ40.5mm	
重　量	135g	105g	250g

リモートコードS/L

ミノルタCLEは電磁レリーズを採用していますから、リモートレリーズターミナルにリモートコードを取り付けるだけで遠隔操作ができます。コードの長さはSが50cm、Lが5mです。リモートコードS/Lは、三脚などを用いてスローシャッターを切るときにお使いください。カメラぶれを防ぐのに最適です。さらに、リモートコードLは、野外の観察記録(野鳥、動物)の撮影で、被写体に気づかれないようにシャッターを切りたい場合に最適です。

視度調整アタッチメントVN

ファインダー内の視野枠、距離計およびLEDが、はっきり見えない遠視あるいは近視の方は、本アタッチメントを使えば見やすくなります。
遠視用No.1〜No.5/近視用No.6〜No.9

40.5mm ACフィルター

40.5mmのミノルタフィルターには次のような8種類が用意されています。
L37(UV)、Y52、O56、R60、IB(スカイライト)、A12(85)、B12(80B)、ND4X

ミニトライポッドTR-1

ブラック仕上げの高級小型三脚です。
コンパクトタイプですから、
手軽に携帯できます。

ショルダーケースCLE

ショルダーケースCLEは、カメラ・交換レンズ・フラッシュ一式およびフイルムなどを収納することができます。

カメラケース

カメラケースはカメラを持ち歩く場合など、不用意にカメラやレンズにキズがつかないよう保護します。

手入れの仕方

(1)カメラの清掃は、からぶきで
カメラは、ホコリをきらいますので、ときどきカメラの清掃をしてください。
まず、ブロアーでホコリを吹き飛ばしてから、柔らかい清潔な布で軽くふき取ってください。カメラボディにシンナー、ベンジンなどの有機溶剤は絶対に使用しないでください。

(2)レンズの清掃は、レンズクリーナーで
レンズを汚さないように、ご注意ください。もし、汚れた場合、ブロアーでホコリを吹き飛ばしてから、柔らかい清潔な布でふいてください。
それでも取れないときには、レンズクリーニングペーパーに市販の液体クリーナー(コダック製、富士フイルム製など)をごく少量つけて軽くふいてください。
液体クリーナー以外は、絶対に使用しないでください。

(3)海岸で撮影した後は
ブロアーでホコリを吹き飛ばしてからカメラの表面を柔らかい布でよくふき、塩分などをふきとってください。

(4)ボディのバヨネット座板面を清掃するとき
シンナー、ベンジンなどの有機溶剤を含んだ布でボディのバヨネット座板面をふくと、潤滑剤が取れてレンズの着脱が重くなりますから、汚れたときは清潔な布で軽くふき取るだけにしてください。ご使用中にレンズの着脱が重くなったときは、最寄りの各地サービス・ステーションにご相談ください。

アフターサービスについて

(1)本製品の補修用性能部品は、10年間を目安に保有しております。
(2)アフターサービスに関しては『アフターサービスのご案内』に詳しく記載しておりますから、ご覧ください。

保管の仕方

(1)2週間以上使用しないとき
できるだけ電池を取出しておいてください。電池の液もれで、本機を害することがあります。

(2)カメラの保管場所は
高温・多湿のところやホコリッぽいところは避けて、風通しのよいところに保管してください。乾燥剤(シリカゲルなど)といっしょに保管すれば、より安全です。高温(50℃以上)の場所、薬品を扱うところ、および防虫剤入りのタンスは避けてください。

(3)カメラを持ち運びするとき
自動車のリアウインドやトランクの中などに放置すると、真夏の炎天下では極度の高温になり、本機を故障させることがありますので、このような場所には放置しないでください。

取扱い上の注意

①カメラは精密機械ですから、落したり、大きな衝撃を与えたりしないでください。また、カメラを水中に落したり、カメラ内部に水滴が入ったりすると、内部の手の届かない所まで水分が回ってしまい、部品がサビついてしまうことがあります。こうなると修理不能か、修理ができても修理費用が高くなりますから、水辺で使用するときは十分ご注意ください。

②極めて低温の所で使用するときは、正規の作動をしないことがありますから、カメラを保温しながらお使いください。特に、急激な温度の変化は、カメラ内部に水滴を生じる危険性がありますから、絶対に避けてください。

③レンズキャップを取はずした状態で太陽にカメラを向けたり、放置したりすると、シャッター幕が焼けることがあります。撮影しないときは、必ずレンズキャップを取付けておいてください。

④フイルムを入れないでシャッターを切ると、シャッター速度はファインダー内表示の速度よりも長くなることがありますが故障ではありません。

主な性能

項目	内容
カメラタイプ	ミノルタ ダイレクト測光自動露出方式 距離計連動35mmフォーカルプレンシャッターカメラ(レンズ交換式)
AE方式	絞り優先式
使用フイルム	J135 ロールフイルム パトローネ入り
画面サイズ	24mm×36mm
レンズマウント	バヨネットマウント(ライツミノルタCLと同一)
交換レンズ	ミノルタ M-ロッコール 28mm F2.8/ミノルタ M-ロッコール 40mm F2 ミノルタ M-ロッコール 90mm F4
ファインダー	実像式 逆ガリレオ 透視ファインダー
ファインダー倍率	0.58倍
ファインダー視野率	85%(40mm標準レンズで3mのとき)
ファインダー視度	−0.52 ディオプター
連動距離計	スプリットイメージ・二重像合致式 基線長49.6mm 有効基線長28.9mm
視野枠	28mm、40mm、90mmブライトフレーム自動切換式 パララックス自動補正(∞〜0.8m)
ファインダー内表示	シャッター速度目盛、シャッター速度表示用LED、シャッター速度連動域外警告用LED、フラッシュ発光表示
シャッター	電子制御式 横走行 フォーカルプレンシャッター
シャッター速度	オート 1/2秒〜1/1000秒(無段階)シャッターダイヤル<Ⓐ位置ロック付 マニュアルB(バルブ)、1、1/2、1/4、1/8、1/15、1/30、1/60、1/125、1/250、1/500、1/1000秒 各クリックストップ付、シャッターダイヤルはエンドレス回転式
シャッターレリーズ	電磁レリーズ、電池電圧低下時にレリーズロック
セルフタイマー	シャッターボタンによるスタート、作動時間約10秒、LEDで作動表示(レリーズ予告付)
フラッシュシンクロ	1/60秒以下の低速時に同調、1/60秒より高速では発光しない(オート、マニュアル時とも)、専用フラッシュ(ミノルタ オート エレクトロフラッシュ CLE)使用時はTTL自動制御、X接点のみ、フラッシュバルブは1/15秒より低速度に同調

項目	内容
アクセサリーシュー	ダイレクト接点、シンクロ オート コントロール接点(ミノルタ オート エレクトロフラッシュ CLE、320X、200X、132X 118X用)、TTL自動調光接点(ミノルタ オート エレクトロフラッシュ CLE用)
測光方式	ミノルタ ダイレクト測光による中央重点的平均測光
受光素子	シリコンフォトセル1個(ボディ下部中央)、専用フラッシュ使用時TTL自動調光にも使用
自動露出範囲	EV3(F2 1/2秒)〜EV18(F16 1/1000秒)、(ASA/ISO 100、F2レンズ使用時)
ASA/ISO感度範囲	ASA/ISO 25〜1600(シャッターダイヤル引上げ式、1/3段ごとにロック付)
露出補正装置	標準値より±2EVの範囲で補正可能、1/2段ごとにクリック付
フイルム巻上げ	一作動レバー巻上げ式、巻上げ角130°、予備角30°逆巻き式
フイルムカウンター	自動復元順算式
フイルム巻戻し	巻戻しボタンおよび巻戻しクランクによる方式、巻戻しボタン自動復元
裏ぶた	裏ぶた開閉ノブ引出し回転式、ワンタッチロック式
使用電池	LR44(A76)型アルカリマンガン電池(1.5V)、またはG13型(JIS SR44)銀電池(1.5V)2個
電源スイッチ	センサースイッチまたはシャッターボタンに連動(不時露光防止用ON・OFF切り換えスイッチ付)
測光スイッチ	シャッターボタン タッチスイッチ式
バッテリーチェック	バッテリーチェックボタン押し込みによるランプ表示式、電池電圧低下時レリーズロック(ランプが点灯しなくてもレリーズロックされなければ使用可能)
その他	リモートレリーズターミナル付、メモホルダー(DIN-ASA換算表)付、視度調整アタッチメントVN取付け可能
大きさ(ボディのみ)	77.5mm(高さ)×124.5mm(幅)×32mm(奥行)
重量(ボディのみ)	375g(電池別)

● ここに記載の性能および外観は、都合により予告なく変更することがあります。